

特集

3 全面実施への助走 第1回

つづけたくなる授業研究

4 課題整理

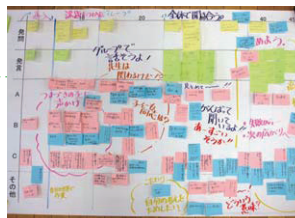
どこが難しい？ 授業研究

— 読者アンケート結果より

6 学校事例 1

校内研究を学校づくりの核に
「とことん考える」子どもを育む

山形県天童市立高揃小学校



11 学校事例 2

授業で細かく子どもを見取り
一人ひとりに意味のある授業をつくる

高知県高知市立介良潮見台小学校

16 学校事例 3

複式校同士の無理のない連携で
外部の視点を効果的に活かす

北海道倶知安町立西小学校樺山分校、ニセコ町立近藤小学校



21 学校事例 4

校長の率先垂範と教育委員会の支援で
「日々の授業」にこだわり抜く

和歌山県有田川町立藤並小学校、有田川町教育委員会

連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い

求め続け、学び続けるからこそ得られる出会いがある

東京都世田谷区立給田小学校校長◎土橋 稔

26 Let's go! 外国語活動

気張らずに時間をかけて、教師全員で外国語活動に取り組む

山梨県北杜市立高根西小学校

28 つながる学校と家庭の学び

家庭での会話が弾み国語力が伸びる「日の出っ子ノート」

福岡県春日市立日の出小学校

32 読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。

また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

求め続け、学び続けるからこそ 得られる出会いがある

東京都世田谷区立給田小学校校長 土橋稔 DOBASHI MINORU

教師は日々、さまざまな働きかけの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、土橋校長が語る。

体育倉庫前で 考え込む先輩教師

新採で渋谷区立猿楽小学校に着任した当初は、授業が辛くて仕方ありませんでした。「どうすれば45分間を持たせられるのか……」と暗澹とした気持ちで、教室に向かう階段を上ったことを今でも覚えています。ところが2週間ほど経つと、そんな憂うつは吹き飛びました。次第に子どもとの人間関係が出来て教師の楽しさを実感しつつある中で、給料日がやって来たのです。初めての給料を手にして、「自分は仕事で学校

に来ているのだ」と、甘い気持ちが瞬時に抜けたことを思い出します。3歳年上で、私にとってはまさに頼れる先輩だった米田孝一先生との出会いも、教師としての自覚を深めてくれました。体育主任だった米田先生は、子どものためにとことん考えることを信条とする方でした。ある日、米田先生が体育倉庫の前に座ってなにやら思案顔でした。尋ねると、「いつも体育倉庫が片付かないのは、用具の配置に問題があるからに違いない。どうすれば子どもが片付けやすい体育倉庫になるかを考えている」。きちんと片付けられない



どばし・みのる 1977年、新採として渋谷区立猿楽小学校に着任。目黒区立菅刈小学校、世田谷区立東玉川小学校などを経て、2004年、世田谷区立給田小学校に校長として着任。現在に至る。

1977(昭52)
渋谷区立猿楽小学校で
米田孝一先生と出会う



懇親会での1コマ。
若き日の土橋校長(右)と
米田先生

1983(昭58)
目黒区立菅刈小学校に
赴任。同校に
勤務していた頃、
野口芳宏先生、
有田和正先生、
正木孝昌先生と出会う

1991(平3)
杉並区立
杉並第六小学校に赴任

1998(平10)
世田谷区立
東玉川小学校に
教頭として赴任

2002(平14)
世田谷区立
松沢小学校に赴任

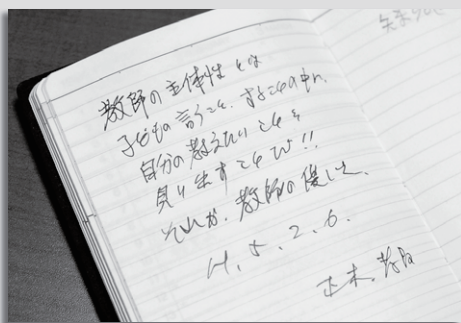
2004(平16)
世田谷区立
給田小学校に
校長として赴任

子どもや担任の指導が悪いとは思わず、教師として出来ることを精一杯考えていたのです。

同様に、授業も考え抜かれていました。サッカーが上達しないのはトランプが難しいからだと考え、扱いやすいようにボールの空気を少し抜いてみる。ソフトボールでは、攻撃側のチームからピッチャーを出して打ちやすいボールを投げさせ、守備側の全員の運動量を増やす。柔軟でユニークなアイデアにはいつも感心させられました。

教え込むのではなく、楽しみながら自発的に学ぶ環境をつくる。そのような米田先生の考え方は、私の授業観に大きな影響を及ぼしました。

当時を振り返って思うのは、私自



正木先生の直筆メッセージ。研究会に講師としてお招きしたとき、懇親会で「何か一言を」とお願いして書いていただいた

身がより良い授業を模索していたからこそ、米田先生の授業に共感できたのではないかとことです。そうでなければ、きっと米田先生の「姿」が見えなかったでしょう。

一瞬で人生が変わるようなことは、そうはありません。自分から求め続け、教師として学び続ける姿勢があつてこそ、良い出会いを引き寄せ、自分を少しずつ変えられるのだと信じています。

出会いのチャンスは自分でつかんでほしい

30代の頃、研究授業や紹介により、野口芳宏先生（元千葉大学教育学部附属小学校）、有田和正先生（元筑波大学附属小学校）、正木孝昌先生（元筑波大学附属小学校）という3人の先生に出会えたのも、「もっとよい授業をしたい」という気持ちがあつたからだと思います。研究授業や書籍を通して学んだことの大きさは本当に計り知れません。先生方の授業に共通していたのは、子どもたちが自分から学びに向かいたくなる気持ちを引き出していたことです。教師が「1+1=2だぞ」と教え込むのではなく、子どもが「1+

子どもと共に学び続けることでプロの教師であり続けられる



1=2なんだ！」と驚きや発見とともに理解する、そんな授業でした。

「こういう授業なら、皆、楽しみながら学んでくれるはず」と、学んだことはすぐに実践しました。が、どれだけ素晴らしい指導法でも、子どもの実態とかけ離れていては、十分に効果は発揮されません。当時の私は、まだまだ一人ひとりの子どもの考えを十分にくみ取る力がなく、先生方のような授業は出来ませんでした。それに気付いたのもまた、学

びだったと思います。

3人の先生方には「名人の授業」として校内研究で授業をしていただきました。私が出来るのは、出会いのチャンスを与えることまで。本校の先生たちには貪欲な気持ちを持って、その出会いを自分のものにしてほしいと思います。

私自身、今後もより良い教育を求め続けます。子どもと共に学び続けることで、プロの教師であり続けることができると思っています。

特集

全面实施への助走 第1回

つづけたくなる 授業研究

新学習指導要領の全面实施まであと9か月余り。

学力を高め、自ら学びに向かう姿勢を育む授業をつくるために、

教師自身が「つづきたい」と思える授業研究とはどのようなものか。実践を通じて考える。

Q 「学校全体での授業力向上」にとって、校内での授業研究*はどの程度有効であると感じますか

全く有効ではない 1%

有効だが他にもっと有効な手段がある 14%

最も有効である 85%

同僚と同じ子どもを見ながら進められるため

*授業を相互に見合う取り組み等も含む

※『VIEW21』小学版読者モニター(小学校教師)のアンケート結果より。2010年2~3月、用紙を郵送し、ファクスとインターネットで回収。有効回答数は98

—— 読者アンケート結果より —— どうかが難しい？ 授業研究

小誌が行った読者アンケートでは、校内授業研究についていくつかの課題があることが明らかになった。今号では、授業研究が日々の授業力向上につながるがっている4つの実践を紹介。
 授業研究のねらいや、取り組み方は異なるものの、そこには共通するエッセンスが感じられる。

課題

研究テーマを共有するのが難しい

「テーマが具体的でなく、**目的を共有できていない**」

「みんなが納得するテーマではないため、**当事者意識が高まらない**」

意見を言い、話し合える雰囲気がない

「教師同士が**気を遣いすぎ**、核心をつくような話し合いにならない」

「**若手教師が発言しにくい**」

研究の成果を実感できない

「前の授業研究が生かしきれず、実践として**積み上げられない**」

「研究が形式的になり、子どもの**力の伸びに結び付いていない**」

環境が整っていない

「忙しくて、**研究に割ける時間が少ない**」

「研究を**主導できる教師がない**」

「**参観者の学級を自習にする時の対応等**、体制づくりが難しい」

教師が主体的に 取り組めていない

「教師が『**やらされている**』と感じていることが多い」

「『**自分の力を向上させる**』という意識になりにくい」

つづけたくなる授業研究

解決のヒント

事例 1

山形県天童市立高掬小学校
たかだま

特徴

- 校内研究を学校づくりの柱とし、
日常と一体化して
研究を進める
- 事前・事後研究会で、
「自分の授業」として
語り合う

P.6

事例 2

高知県高知市立介良潮見台小学校
けらしおみだい

特徴

- 指導案や授業観察の
方法を工夫し、
授業の改善点を明確にする
- 三つの研究部会で、**全員で**
子どもを多角的に見取る

P.11

研究テーマを教師全員で共有

話し合える雰囲気づくりを推進

成果を実感し、日常の授業に結び付ける

教師が主体的に取り組む
「つづけたくなる」授業研究に

事例 3

北海道倶知安町立西小学校榊山分校、
ニセコ町立近藤小学校
くつちやん

特徴

- 小規模校同士で
継続的に連携、
研究の視点を広げる
- 普段の授業を見せ合い、
日常の授業の改善に結び付ける

P.16

事例 4

和歌山県有田川町立藤並小学校、
有田川町教育委員会

特徴

- 日々の授業を
大切にすることを
授業改善の中心に据える
- 校長のリーダーシップと
教師の自主性の両輪で
進める

P.21

校内研究を学校づくりの核に 「とことん考える」子どもを育む

山形県 天童市立高掬小学校

天童市立高掬小学校では、意欲的に日々のくらしや学びに取り組み、とことん考えて自分の言葉で思いを伝えられる子どもの育成を目指す。校内研究を学校づくりの柱と位置付け、教師一丸となって取り組んでいる。

■ 学校概要

児童数203人。8学級（うち特別支援学級1）。
教員数18人。40代が多い。
*取材時（2010年3月）のもの

■ 研究の方向性

- 子どもが納得するまで考え、自ら問いや答えを追求する姿勢を育む
- **すべての教育活動で、目指す子どもの姿に迫る**という考えから、校内研究を学校づくりの柱に
- 教師も常により良い方法を考え続けることを重視
- 授業研究会は、目指す子どもの姿・授業づくりのポイントの共有や、振り返りの場と位置付ける

■ 取り組みと成果

- 事前研究会では授業者以外の教師も指導案づくりから参加する
 》「**みんなの授業**」という**一体感**を生み、事後研究会でも「授業者への評価」にならない
- 事後研究会は「授業を語る会」とし、自由に語り合える雰囲気をつくる
 》自分の授業として捉えられるので感じたことを言いやすく、建設的な議論になる

■ 成果を支える要因

- 研究による成果を教師自身が実感しながら進める
- 職員室で子どもの名前を出して様子を話すなど、管理職が**子どもの話をしやすい雰囲気**をつくる
- 教師全員で全校児童を見取る方針

S c h o o l D a t a

◎周囲に畑が広がる静かな環境に位置する。研究主題を「学び合う子どもが育つ学習活動」と設定し、子ども同士が主体的に学び合う授業づくりを進める。



校長 村形啓行先生

児童数 197人 学級数 7学級（うち特別支援学級1）

所在地 〒994-0068 山形県天童市大字高掬北239

TEL 023-655-2051

URL <http://www.takadama.jp/>

公開研究会 2010年度の日程未定

*2010年4月時点

つづけたくなる授業研究

◎課題と研究の方向性

「待つ指導」を徹底

高嶺小学校は、「くらしや学びを自分たちでつくり出す子ども育成」と「学級の全員が納得するまでとことん考える授業づくり」を目指す。「くらしや学びをつくる」とは、納得のいくまで考え、日常生活や学びに主体的にかかわっていくことだと、同校では定義している。その背景について、村形啓行校長は次のように語る。

「本校には素直で友だちと仲良くできる子どもが多いのですが、周囲の意見を踏まえてもつとよく考えようとする積極性や、友だちとは違う自分の考えを強く主張する力に弱さを感じます。児童数が少なく、皆が顔見知りのため、言葉に出さなくても気持ちを通じやすいこともあるのでしょう。友だちとぶつかることを恐れて、意見を控える子どももいます。その殻を破るために、納得するまで考えて問いや答えを自らつくり出し、それを伝えていく力を育てたいと考えています」

そのために教師が心掛けるのが「待つ」指導だ。子どもの答えがねらいから外れたとしても、「違うよ」と言うのではなく、「この部分も見てもっと考えてごらん」と、更に考えを深めるように促す。研究主任の青山紀子先生（当時）は次のように説明する。

「解決法を教えるのは簡単ですが、子どもが考え抜くまで辛抱強く待ちます。どのような場面に直面しても、自分で考え、納得して主体的に取り組む姿勢を身に付けさせたいと考えるからです」

目指す子ども像は教育活動のさまざまな場面で育つ、という考えから、こうした指導は給食や清掃、行事など学校生活全般に及ぶ。教務主任の堀川一男先生（当時）は次のように話す。

「例えば、卒業式では、卒業式とは何か、どのような気持ちで臨むべきかを問い掛けます。最初は目的意識が希薄で返事がありませんでした。最初は、何度も対話するうちに、6年生では『お世話になった先生や下級生、両親に感謝を伝えたい』『中学校でも頑張るといった気持ちを表したい』といった答えが聞かれました。卒業式が感謝と決意を表す場であると理解し、元氣な返事や正しい姿勢が大切だと、自ら感じ、取り組むようになったのです」

同校では、このような指導すべてが「校内研究」であると考えている。つまり、日々の学校づくりと校内研究が一体の関係にある。

「校内研究と学校づくりがばらばらで、両方進めるのが大変」という声をよく聞きますが、本校ではそのようなことは全くありません。日常の指導も教師全員で協力し合いながら進めます。日々続けていることが校内研究なのです」（青山先生）

学級全員が納得するまで考える授業を目指す

毎日の授業では、「子どもが何をどのように考えたか」という視点を大切にしている。

「本校では、日常場面すべてが研究の場であると捉えた上で、とりわけ授業を重視しています。授業でも目指しているのは、意欲的



村形啓行 Murakata Hiroyuki
天童市立高嶺小学校校長
「子どもが生き生きと過ごせる、小規模校の良さを生かした子ども中心の学校をつくりたい」



戸田一彦 Toda Kazuhiko
天童市立高嶺小学校教頭
「子どもと教師の姿をよく見て、自分たちの取り組みの手応えを喜び合える学校を目指す」



堀川一男 Horikawa Kazuo
天童市立高嶺小学校教務主任。「絶対の愛が子どもを変え、教師に思いがあれば、子どもは心を開いて変わっていく」



青山紀子 Aoyama Noriko
天童市立高嶺小学校研究主任。6学年担任。「子どものことを決め付けず、とことん理解しようとする気持ちを忘れずにいたい」



田中美香 Tanaka Mika
天童市立高嶺小学校研究副主任。2学年担任。「いつでも子どもに語りかける。授業以外でもたくさんの会話をしたい」

*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

に追求し、考え抜き、意見を主張できる子どもの育成です」(村形校長)

自分自身で考えて答えを追求していく姿勢は、子どもだけでなく、教師にとっても重要であるというのが、同校の考えだ。

「教育にマニュアルはありません。どうすればより良くなるかを常に考える教師集団でありたいと思っています。教師自身も自分の姿を振り返り、自問自答することが私たちの研究の基本です」(青山先生)

2008年度の研究主題を考える際には、次のような反省が挙げられた。「どの子ども粘り強く取り組む授業になっているか」「はきはきと話す子どもの意見に『分かった』気持ちになっていないか」「教師にとって都合のよい意見だけで授業を進めていなかったか」といった点だ。

これらを踏まえて重点を置いたのは、「学級全員の子どもが『納得』するまでとことん考える授業づくり」だ。

取り組みと成果

事前研究会で

「みんなの授業」として考える

授業づくりの「確認」の場として活用するのが、年4回実施する授業研究会だ。授業づくりのポイントや子どもの実態を改めて振り

図1 授業研究会の概要

● 年4回の授業研究会

1回につき、高学年と低学年の担任各1人が授業を公開。事前研究会と事後研究会を行う。

● 夏休みの1日研修

毎年、テーマは異なる。宿泊して教育についてじっくり語り合うこともある。

■ 事前研究会 ■

低学年の担任と高学年の担任に分かれ、合計3～6時間をかけて、指導案などについて話し合う。

工夫点

- 授業者の提案する指導案の良し悪しではなく、子どもが考えを深められる指導の流れになっているかを全員で考える。これが授業者だけでなく、「みんなの授業」という意識を生む。
- 校務などの都合で途中から参加しても良いなど、気軽に参加できる雰囲気을大切にしている。

■ 事後研究会 ■

「授業を語る会」という名称で、全員が一堂に会して1時間程度話し合う。

工夫点

- 授業者と、事前研究会で指導案づくりに関わった教師1人とが、授業について自由に話し合い、他の教師も話に加わっていき、全体での話し合いに発展させる。
- 授業者への評価ではなく、事前研究会で考えた内容を基に、「自分の授業」として、子どもの発言や姿について考える。

返り、目指す子ども像に迫る教師の「かまえ」を学校全体で共有する場と位置付ける。戸田一彦教頭は、その意義を次のように語る。

「日常の教育活動すべてが研究であり、授業研究会はその一部ですが、新しく来た先生も含め、研究の方向性を子どもの姿で確認し合う場としてはとても重要です。形式的にならないようにしています」

授業研究会は年4回、事前研究会と事後研究会をセットで実施する(図1)。事前研究会、事後研究会共に「みんなの授業」として「子どもにとって授業はどう見えるのか」を考えることが特徴だ。

「『みんなの授業』という意識を持っていれば、たとえ授業が上手いかなかったとして

も、授業者だけの責任ではなく、皆で反省を

して、原因を明らかにしようとする話し合いになります。授業者も反省点を包み隠さずに話せるので、授業改善にとっても有効です」(戸田教頭)

07年度までは、授業研究会での教科を特定していなかったために議論が多岐にわたることがあり、08年度からは算数の授業に焦点を当てている。しかし、算数はあくまで切り口だと、戸田教頭は説明する。

「算数を選んだのは、算数の指導法に課題があるからではなく、『何をどのような手順で考えているか』といった子どもの考えが見えやすい教科だからです。算数の授業で子どもを見取ったり、考えを表現させたりする方

つづけたくなる授業研究

図2

「研究集録」「各学年の実践」に書かれている要素

1. 子どもたちへの願い
子どもの実態と目指している姿など

2. 授業実践で明らかになったこと
指導案などは書かず、授業後に実践者が感じたことを書く

3. 1年間の実践を振り返って学んだこと
年間を通じての気付きや反省、今後の願いなどを自由に記述。「答えだけに目が行っていた」「まだまだ褒めることが足りない」など率直な言葉での振り返りも多い

法は、他教科や日常のあらゆる場面に生かすことができます」

また、同校の研究集録の「各学年の実践」には各担任の「1年間の振り返り」が、それぞれの観点、言葉で書かれている(図2)。「足りなかったことを含めて率直に書きた

「授業を語る会」という名称について、「教師がそれぞれ

事後研究会は「授業を語る会」

め、教師にとってはつらい作業ですが、課題をしっかりと見つめることで少しずつ研究を積み重ねられていますと感じます」(青山先生)

同校の「研究集録」はとてもシンプルだ。「各学年の実践」は1学級につきA3見開き1ページ。「研究を形式的なものにしたい」という同校の姿勢が感じられる *高橋小学校 平成20年度「研究集録」より

「最初から全体で話すより、2人の会話が形式の方が、授業者が感想や反省を率直に話せま

師がそれぞれ授業に対する考えや思いを自由に語り合える場にした」と、戸田教頭は説明する。司会者を立てず、教師2人が語り合いを始める形式にも同校の思いが現れている。「最初から全体で話すより、2人の会話が形式の方が、授業者が感想や反省を率直に話せま

す。「A君の発言に皆がつかられてしまいました」「あの発話で流れが変わりましたね」などと話を進めるうちに、他の先生方が次々に入ってきます。事前研究会で内容を十分に共有しているため、どの先生も「あそこが上手くないかなかったのはなぜだろう」などと、自分の授業として、子どもの姿についてとことん話し合います」(青山先生)

学級全員が納得するまで考える授業を目指すことが共有できているため、事後研究会でも「子どもにとってどのような授業だったか」という議題から外れることはない。「課題は子どもの中にすんなりと落ちたか」「課題解決に向かって、どのように考えたか」「共同思考への導き方は良かったか」などを話し合うことが多い。このような事前研究会、事後研究会を重ねることで課題を焦点化させたり、子どもの言葉を大切にすることで子どもが納得した学びを得られたりする手応えがつかめてきた。

授業研究会で活発に議論できる土壌は、日常の関係から生まれている。他の教師が教室に入って授業を見学するのは、同校ではよくある光景だ。子どもの様子を中心として、気付いたことを伝える。同校に赴任して3年目という研究副主任の田中美香先生(当時)は次のように話す。

「初めは、『自分だけでクラスをまともなればいけない』という気負いがありました。

しかし、いろいろな先生が授業中に教室に入ってきて、後から『Aさんの発言、良かったね』などと声を掛けてもらうのは、とても勉強になりますし、『皆で一緒に子どもを見ている』という安心感も生まれました」

教師の安心感や信頼感が育まれていることが、更に研究をより良いものへと導いている。

◎ 成果を支える要因

子どもの変容を実感して取り組む

理念を伝えるだけでは、全員が本気になって研究に取り組むのは難しい。子どもの変化を通して「納得」しながら研究を進めることが重要だと、田中先生は話す。

「最初は子どもが考えるのを待つ指導が理解できず、指示したい気持ちを抑えられないこともありました。しかし、少し時間が掛かりましたが、そのような指導の方が子どもの中に残るものが大きいことに気付き、納得して取り組めるようになりました」

6年生の修学旅行でも変化した子どもの姿が見られたと青山先生は言う。

「班で自由行動をした時に、教師はほとんど指示をする必要がありませんでした。旅館の方が驚いていたほどです。自分たちで考え、行動する姿勢が身に付いているのだと、とてもうれしくなりました」

すべての教師が全校児童の担任

同校では、「すべての教師が全校児童を見取る」という方針を共有している。異なる視点から多角的に子どもを見取れるだけでなく、担任が1人で問題を抱え込まずに済む。

「『今日、A君がこんなことをしました』と話した時に、『A君、随分、成長しましたね』などと、周りの先生に受け止めてもらえるのはうれしいものです。話したいという気持ちも生まれて、情報共有がどんどん進んでいきます。子どもについての悩みなども共感して聞いてもらえると、『悩んでいるのは私だけではないんだ』と、とても気が楽になります」(青山先生)

管理職が教師をつなげていく

日常的に子どもについて話し合う雰囲気作りは、管理職の日頃のかかわりが大きい。

「『先生のクラスのAさんがこんなことをしていましたよ』と、子どもの名前を出すと、話が広がり、他の教師も会話に参加しやすくなります。日頃から子どもの姿をよく観察し、気付いたことは担任などに伝えるようにしています」(戸田教頭)

堀川先生は、「管理職の先生が具体的に名前を出して話し掛けてくれることで、普段から職員室で子どもの話をする空気が生まれていると思います」と話す。

村形校長が重視する

校長としての役割

まずは、先生方、そして子どもたちへの感謝の気持ちを忘れないことです。先生方が本当に一生懸命指導に当たっていることは常に身近で感じていますし、子どもの姿から学ぶことも尽きません。先生方が仕事に集中できて、その成果が子どもに還元されるように、校長として環境づくりに力を入れていきたいと考えています。

学校と保護者・地域を結び付けることも、校長の役割の一つです。先生方が子どもに対して強い熱意を持って取り組んでいることを、いかに効果的に発信して保護者や地域との協力関係を築いていくかという視点も大切にしたいと思います。

教師が自分の考えや感じたことを伝え合う関係は、日々の研究を通じてつくられてきた。次の段階として、指導方法についても更に深く話し合える関係をつくりたいと話す。

「どの先生にも培ってきた指導法がありま
すから、授業について何か指摘されることに
は抵抗感があるものです。しかし、目指す子
どもの姿をしっかりと共有していれば、それに
照らし合わせて互いに指摘できる関係をつく
ることは可能だと思います」(戸田教頭)

授業で細かく子どもを見取り 一人ひとりに意味のある授業をつくる

高知県 高知市立介良潮見台小学校

「子どもが学びに向かわない」という課題に対し、子どもの実態の理解から研究を始めた高知市立介良潮見台小学校。研究授業では一人ひとりの学びの姿を追う、次の授業に生かすことに重点を置くと共に、学校ぐるみで日常的に子どもの様子を共有している。

学校概要

児童数452人。18学級（うち特別支援学級3）。
教職員数は30人、20～30代が少なく、40代後半以降が中心と、平均年齢が高い。

*取材時（2010年3月）のもの

研究の方向性

- 「落ち着いた学習環境をつくりたい」という教師の共通の思いで研究を開始
- 子どもの実態を把握し、**子どもに寄り添い、考えや思いを生かした授業**を目指す

取り組みと成果

- 「授業研究部」「ケアリング研究部」「開かれた学校づくり研究部」を設置。多角的に子どもを捉える
- 指導技術ではなく、**子どもがどのように学んだかを付せんなどで丁寧に追い**、事後研究会で検討
 〉子どもの実態を踏まえた、子どもに寄り添う授業になる
- 課題のある**子どもの情報を学年を超えて共有**
 〉子どもへの理解が深まる。子どもにとっては、「見られている」安心感、自己肯定感につながる

成果を支える要因

- ある学年の子どもの変化により、研究の効果を実感。教師の意欲が高まる
- 校務を一役一人とし、研究授業時には子どもを帰宅させるなど、**教師が研究に集中しやすいようにする**

S c h o o l D a t a

◎教育目標は「心ゆたかに、学びあい育ちあう介良潮見台の子」。オープン・スペースを有効活用した実践に取り組む。開かれた学校づくりを目指し、家庭や地域との連携にも力を注ぐ。



校長 大石 格先生

児童数 396人 学級数 17学級（うち特別支援学級2）

所在地 〒781-5108 高知県高知市潮見台1-2602-1

TEL 088-860-2020

URL <http://www.kochinet.ed.jp/kerashiomidai-e/>

公開研究会 2010年度の日程未定

*2010年4月時点

◎課題と研究の方向性

「どうしたら学びに向かうのか?」
答えを探し続けた

介良潮見台小学校は、1998年に周辺の団地の新造に伴って開校した。現在のような校内研究に着手したのは2005年。当時は「高学年になるほど学習に向かわない」「教師の指示が子どもに届かない」といった課題に直面し、教師は皆「静かで穏やかな雰囲気」の授業をつくりたい」という思いを抱いていた。まず他校の取り組みを参考にしようと、学校規模が似ていて、子どもが落ち着いて授業を受けていると聞いた、神奈川県茅ヶ崎市立浜之郷小学校に約3年間、教師が代わる代わる訪問。授業見学や教師の話から学んだことを話し合い、自校の授業の在り方を検討した。

教材研究よりも 子どもの実態把握に重点

同校の校内研究の根底には、「授業がうまくいかないのは教師の問題であり、子どもに責任はない」という考えがある。授業の問題点を話し合ううちに、「最大の課題は、指導が子どもの実態に合っていないこと」という結論に至った。研究主任の近藤公枝先生は、次のように振り返る。

「子どもに寄り添った指導をしていたつも

りでしたが、『予定した内容を教えなければ』と思うあまり、一方通行の授業になりがちでした。そのため、子どもが授業の内容を理解できず、落ち着かないのだと考えたのです」

まずは子どもの実態を正確に把握する必要があると判断。子どもの思いや考えをくみ取り、それらを生かした手立ての構築を研究の柱に据えた。その土台には「どの子にもその子なりの理由がある」という視点があると、大石格校長は話す。

「例えば、授業中の発言はそれまでの経験が土台となって言葉に現れています。言動の背後にあるものを理解しなければ、教材研究に一生懸命に取り組んだとしても、指導は子どもの実態と離れてしまいます。まずは子どもへの理解が何よりも必要だったのです」

◎取り組みと成果

全員が三つの研究部の いずれかに所属

研究テーマは、「学ぶ意欲を育てる授業づくり・仲間づくり」。子どもの実態を教師がきちんと見取り、すべての子どもの学ぶ意欲を高められる授業づくりを目指した。子どもが互いの意見を聴き合える落ち着いた授業にしようと、サブテーマを「聴きあう教室づくり・思いやる集団づくり」とした。「高学年



高知市立介良潮見台小学校校長
大石 格 Oishi Haru
「一人ひとりが異なる生活環境にあることを忘れずに子どもと接したい」



高知市立介良潮見台小学校
研究主任。 「子どもにも先生にも、誠実に丁寧にかかわる。地域と学校をつなぐことも大切にしたい」



高知市立介良潮見台小学校
松本晶子 Matsumoto Akiko
授業研究部長。「担任ではないからこそ、子ども同士や先生同士、クラス間などを『つなぐ』役割を果たしたい」



高知市立介良潮見台小学校
岡林宏枝 Okabayashi Hiroe
6学年担任。「常に謙虚さや感謝の気持ちを忘れず、子どもが安心して通える学校をつくりたい」



高知市立介良潮見台小学校
岡田浩幸 Okada Hiroyuki
5学年担任。「忙しくても、しっかりと子どもを見ることが大切。自分自身が学び続けることも忘れない」

の課題は、低学年の課題でもある」という意識も共有し、クラスの課題は担任だけの責任とせず、学校全体で一人ひとりの子どもを見取る体制づくりに着手した。

子どもの実態を多角的に捉えるため、05年度には「授業研究部」「ケアリング研究部」「開かれた学校づくり研究部」を設置。教師はいずれかの部に運営部員として所属し、部員を

つづけたくなる授業研究

子どもにとって意味のある授業改善とするために、大きな役割を果たすのが研究授業だ。同校では、学校全体の研究テーマを踏まえた上で、教師それぞれが個人のテーマを設定する。授業研究部A部の部長を務める松本品子先生は次のように話す。

「自分の専門を更に深めたい、不得意教科を克服したいと、教師の課題意識はさまざまです。学級の課題を踏まえてテーマを設定し、他の先生から助言を得ようとする先生もいます。さまざまな研究を共有すれば、多様な気づきが得られるという利点もあります」

09年度は研究授業を9回実施。1回につき3人が授業を公開し、参観者を割り振った。事前研究会は行わない。「事前に指導案の指摘を受けると、授業者の授業ではなくなつて

中心としながら学校全体で研究を進める。授業研究部は、教科学習を担当する「A部」、総合的な学習の時間や人権教育を対象とする「B部」に分かれ、子どもの実態に合った授業の在り方を研究。ケアリング研究部はQ-U調査(*)の実施など子どもへの理解を深めるための研究を行い、授業づくりや生活指導に還元する。更に、子どもをしっかり見取るには地域や保護者の協力が不可欠と考え、開かれた学校づくり研究部が外部との連携に関する研究を担当する。

事前研究会はせず普段の授業を公開

しまうからです」と近藤先生は話す。授業者の普段通りの授業を基に考えることと、時間や労力を軽減する目的がある。研究授業の日程、授業の担当教師、その学級を見る教師は、授業研究部A部が教師の希望に基づいて決め、授業テーマは授業を行う教師に任される。

子どもの様子を克明に記録

同校では、子どもをA層（理解が早い子ども）、B層（平均的な子ども）、C層（課題がある子ども）に分け、C層への指導に重点を置く。研究授業では、C層の子どもを中心に、子どもを見取るための工夫を凝らす。

1点目は、指導案の工夫である。指導案にはC層の日常の姿や支援について具体的に書く(図1)。担任以外の教師も、研究授業がその子どもにとってどのような意味を持つのかをより具体的に考えやすくするためだ。

2点目は、授業観察の方法だ。研究授業では、授業研究部A部が役割分担を決める。教師の発問と子どもの発言を記録する記録係、写真係、C層の子どもを見取る教師など、さまざまな役割を受け持つように割り振る。

学級担任は、A・B・C層から各1、2人をあらかじめ選ぶ。記録係は、その子どもの発言や教師の発問を受けた時の態度など、目

図1 指導案の内容と様式

①指導案の内容と様式

第○学年○○科学習指導案
2009年 月 日 () 校時
年 組 名
場所
支援者

個人テーマ
1. 題材名
2. 題材の目標
3. 指導にあたって

4. 学習計画 (全 時間)
5. 個人への支援

6. 本時の授業
(1) 本時の目標
(2) 本時の学習

*添付資料
・座席表 (A・B・Cも記入・Q-Uの結果の位置を入れる)
・題材 (学習するページ・ワークシートなど)

A: 理解が早い、意欲的な学習態度の子ども
B: 平均的な子ども
C: 課題がある子ども

研究授業で使う指導案のフォーマット。「個人への支援」の欄にはC層の子ども名前とその子の「実態」「課題」「育ちと学びを促すための工夫」を記入し、参観者が子どもの姿を捉えやすいようにしている



上記のシートは、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロードできます。

<http://view21.jp/s0111/>

* 学級集団の状態を把握するための心理検査

に見える様子を細かく付せんに記録する。内面は見る事が出来ないため、子どもの行動を基に考えることを大切にしているからだ。子どもの見取りで中心的な役割を担うのは、C層の子どもを見取る係だ。また、役割が特にならない教師は、自身の気になる子どもを観察するように心掛ける。こうして書かれる付せんの数は、1時間の授業で50枚以上にもなる。

「授業をしていると、子ども一人ひとりの細かい動きには目が届きにくいものです。参観者が『この発問で身を乗り出した』『ここが分からずにあきらめた』といった子どもの行動を記録し、事後研究会での検討材料としています」（松本先生）

事後研究会は授業ごとに行う。模造紙に付せんを時系列順に張り、教師の働き掛け方や子どもの姿など気付いたことを話し合う（写真）。最後に全員で集まり、作成した模造紙を基に話し合いの結果を発表する。

「批評ではなく前向きな意見を述べ合います。授業者が研究授業をして良かったと思えることが、次の研究授業への意欲にもつながるからです」（松本先生）

子どもの言葉を大切にしよう

こうした研究授業を通じ、授業は子どもに寄り添うものになってきた。例えばある研究授業で「数人の子どもが指示の意味が分からず戸惑っていた」と、付せんに書かれたこと

があった。事後研究会では、「ポイントとなる指示語は授業の冒頭で確認しておくが良い」という手立てを皆で共有。更に、子どもに寄り添うことを心掛けるにつれ、自然と子どもに考えさせる授業になっていくという。

「教師の発話が減り、子どもが考えたり、ペアやグループで話し合ったりする時間が増えました。子どもの言葉を大切に、クラス全体で共有することにも重点を置いています」（近藤先生）

6学年担任の岡林宏枝先生（当時）は、自身の授業の変化を次のように感じている。

「子どもの内面にあるもの、例えば発言の内容やその背景にある子ども

の思いなどを捉え、『どうすれば自分から学びに向かうか』という視点で授業を考えるようになってきました。子どもとの信頼関係が重要だということも、強く意識するようになりました」

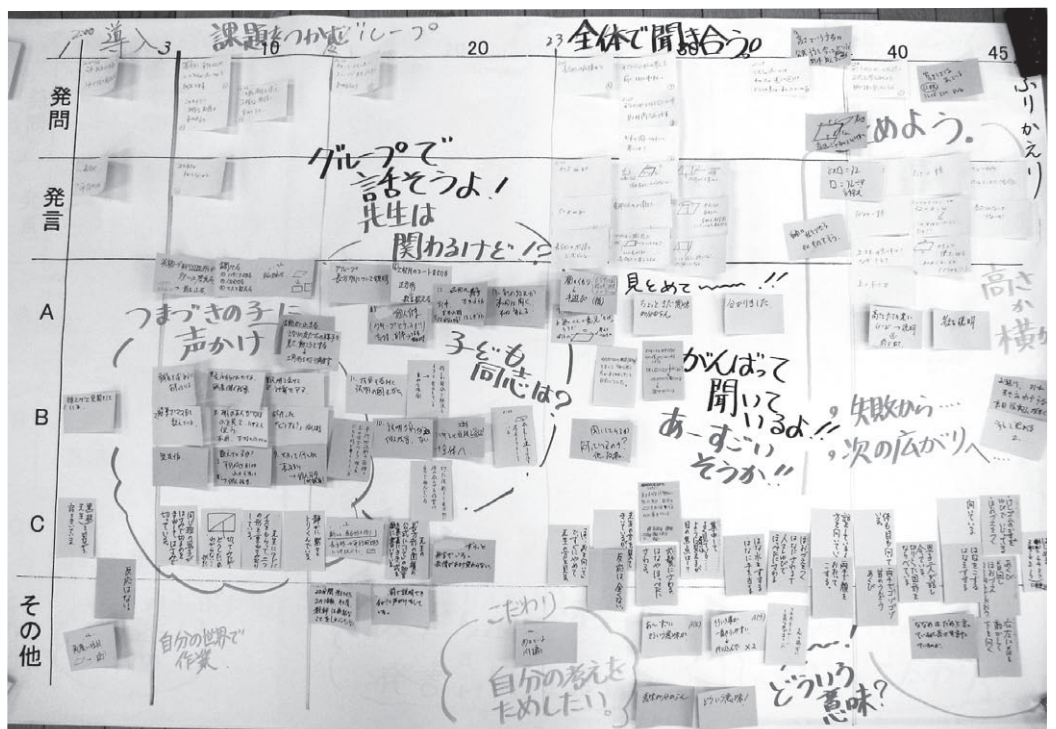


写真 事後研究会では教師の発問・発言、子どもの発言や態度を書いた付せんを左から右へと時系列に張り、これを基に話し合う。それぞれの学力層の子どもが発問に対してどのような反応を示したかが分かりやすい。会での発言は模造紙に直接書く

「どの先生も自分のことを知っている」

研究授業以外の場でも、子どもを見取ることを大切にしている。同校は教室や廊下に仕切り

つづけたくなる授業研究

のないオープン・スペースを採用しており、教師は日常的にさまざまな子どもと顔を合わせる。それを生かし、受け持ちでない子どもにも積極的に関わりを掛けるようにしている。また、子どもにかかわる話は、事務職員とも共有するために出来るだけ職員室で話す。

日常的な情報交換に加え、会議の場も設ける。学校全体で日常的に子どもをケアするため、ケアリング研究部が中心となり、週1回の「児童コーナー」という会議を行う。家庭環境や学習面に課題のある子どもの情報を共有する場で、教職員全員が参加する。5学年担任の岡田浩幸先生（当時）は次のように述べる。

「縦割り活動などの時間に、問題行動を見付けると、以前はすぐに叱っていました。しかし、学年を超えて情報を共有するようになってからは、自分の知らない理由があることが分かり、『なぜこんなことをしたのだからか』とまず子どもの事情を考え、気持ちを理解しようとする意識が生まれました」

授業内外で子どもの実態を把握することにより、校内の雰囲気は大きく変わりつつある。子どもは「どの先生も自分のことを知っている」「いつも先生から見守られている」という実感を持ち、それが自己肯定感につながる。教師は子どもをより細かく見取るようになり、授業の進め方が変わっていく。そのような指導が子どもの学習意欲を更に高めるとい

う好循環が生まれている。

◎ 成果を支える要因

研究の成果を教師自身が実感

研究開始から2年ほどは、授業の雰囲気はなかなか良くなり、多くの教師が「このような研究に意味があるのか」といった不安を感じていた。その雰囲気は、07年度に研究の成果が現れてきたことで大きく変わった。

「4年生の時に授業態度に課題があった学年が、6年生になると驚くほど落ち着いて授業を受けられるようになりました。卒業する時のある子どもが『3、4年生の時、もっと勉強を頑張れば良かった』と言ったのが印象的でした。子どもにとって授業が意味のあるものになっていることを実感し、それまでの苦勞が吹き飛びました」（松本先生）

大石校長は、「先生方は子どもの成長を実感し『もつと良くするには何をすべきか』と、更に意欲的になっていきます。つらい時期を共に乗り越える過程で、『チーム潮見台』を合言葉に教職員の団結も強まりました」と話す。

教師の多忙感を軽減

校務などの担当を一役一人として任せ、打ち合わせなどの時間を大幅に削減した。更に、以前は研究授業の時間は自習としていたが、

現在は毎週水曜日の午後の授業を無くして子どもを帰宅させ、5時間目にあたる時間を研究授業や職員会議として使っている。「気が散ることなく、研究に集中できるようにになりました」と近藤先生は話す。

目標であった「静かで穏やかな雰囲気の授業」は、研究の積み重ねが実を結び、ほぼ達成された。教師の導きにより、子どもが学び合う姿も見られてきた。今後は、子どもが「自ら」学び合う姿を目指して研究を進めていく。

大石校長が重視する

校長としての役割

私が大切にしているのは先生方への信頼感です。本校では一人一研究を行い、テーマ設定は個々に任せています。一人ひとりの自主性を尊重し、細かく指摘をしないように心掛けています。事後研究会でも先生同士の学びあいを重視し、校長として「答え」を出したりはしません。あくまでも同僚として発言し、必要があれば個別に伝えています。

ただし、担任と同じように子どもの姿を知っておくことは必要だと考えています。そうでなければ、他の先生と同じ土俵で話すことは出来ません。日頃から教室を回って授業を見たり、一緒に掃除をしたりして、子どもの実態を把握するようにしています。

複式校同士の無理のない連携で 外部の視点を効果的に活かす

北海道 倶知安町立西小学校榊山分校

北海道 ニセコ町立近藤小学校

北海道の隣接する二つの町にある西小学校榊山分校と近藤小学校は、共に複式学級を有する小規模校だ。子どもや教師の実態から必要性の高いテーマに的を絞り、研究を進める。校内でも互いの連携でも意見を率直に出し合える体制を築くことで、研究を活性化させている。

課題

>> 西小学校榊山分校

児童数30人。教員数10人で、30代が多い。

◎異動により複式授業のノウハウが不足

西小学校榊山分校には海外で教育を受けてきた子どもが多数在籍しており、学習環境の差が生み出す学力差が課題として挙げられる。また、2009年度に半数以上の教員が入れ替わり、複式学級の経験者が減った。複式学級では、ある学年の指導時にもう一方の学年は教師が直接指導しない「間接指導」となる。しかし、一方の学年に活動内容を的確に明示できないまま、一方の学年を指導することもあったという。

「最終的には、間接指導時に教師が細かく指示しなくても、自主的に学ぶ力を子どもに付けることを目指し、まずは間接指導を充実させたいです」と村井満校長（当時）は語る。

>> 近藤小学校

児童数19人。教員数7人で、40代が多い。

◎語彙力や表現力の強化が課題

近藤小学校では、担任は全員、複式学級の経験があり、複式学級独自の指導法は蓄積されていた。課題は、子どもの語彙力や表現力の不足だ。同校には全国各地から移住してきた家庭の子どもが多く、積極的に人とかかわり、意欲的で活発な子どもが多い。小規模校の子どもは内向的だと言われるが、同校では当てはまらない。

それでも、河田茂校長は「限られた人々と接するためか、子どもが自分の意思を伝える語彙が少なく、『楽しい』『楽しくない』といった決まった表現が多いと感じます」と話す。

*児童数、教員数などは取材時（2010年3月）のもの



長谷川 徹
Hasegawa Toru
倶知安町立西小学校榊山分校
研究担当、特別支援学級担任。「子ども一人ひとりをよく見て、その子どもが必要としていることをしていきたい」



滝澤 祐司
Takizawa Yui
倶知安町立西小学校榊山分校教頭
「子どもと教師との温かな人間関係を基盤に、子ども一人ひとりが活躍できる授業づくりが出来る教師を育成したい」



村井 満
Murai Mitsuru
倶知安町立西小学校校長
「すべての人間は、適切な環境を与えられれば成長し続ける存在である」

*プロフィールは取材時（2010年3月）のものです

S c h o o l D a t a

北海道倶知安町立西小学校榊山分校

◎校区には国内有数のスキーリゾート地があり、海外からの観光客の激増に伴い、外国からの移住者も増加。国際的な家庭に育つ子どもも多い、国際色豊かな分校。10人の教職員のうち2人は海外の日本人学校で教壇に立った経験がある。



校長 徳光 茂先生（2010年4月から）

児童数 27人 学級数 5学級（うち特別支援学級2）

所在地 〒044-0078 北海道虻田郡倶知安町字榊山109

TEL 0136-22-0988

URL <http://www.hirafu.net/~kabayama/>

公開研究会 2010年10月8日（金）

*2010年4月時点

つづけたくなる授業研究

成果

◎子どもの変化

- 間接指導の時に、**子ども自身が学習過程を意識**して、次に何をすれば良いのか分かるようになった（西小学校樺山分校）
- 「読む力」「書く力」など、各学級の**重点指導目標とした力が向上**した（近藤小学校）

◎教師の変化

- 学習過程を意識して授業をするようになり、**授業形態が統一**された（西小学校樺山分校）
- 児童に不足している力を意識して指導することで、**指導のポイントが明確**になった（近藤小学校）
- 2校の連携によって、指導の改善がより進んだ。人間関係も深まった（2校共通）

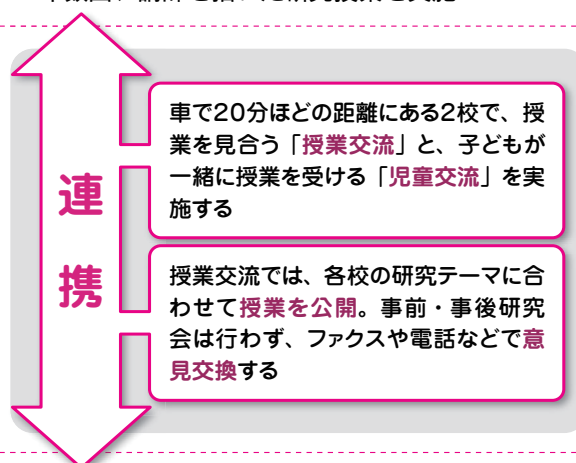
成果を支える要因

- 必要感のある研究テーマを全員で共有
- 少人数だからこそ頑張る
- **子どものために、遠慮せず意見を交わす**
- **気張らない取り組み**を行う
- 教師一人ひとりを尊重する管理職の支援

研究のねらいと取り組み

>> 西小学校樺山分校

- **算教科を中心**に、「確かな学力を身につけ、互いに高め合う授業の改善」を研究主題に
- **間接指導を含んだ「つかむ・かんがえる・まとめる・ふかめる」学習過程の明確化と定着**を目指す
- 年数回、講師を招いた研究授業を実施



>> 近藤小学校

- **国語科を中心に「言語能力を高める授業のあり方」**を研究主題に
- 6年間を見据えて児童に付けたい力を明確にし、**各学級の実態に合わせた重点指導目標を設定**
- 全教師が、前期と後期で1回ずつ授業公開。前期の成果を踏まえて後期の目標を見直す



二セコ町立近藤小学校
 研究担当、1・2学年担任。「子どもたちに確かな学力を付けさせるために、最大限の努力をしたい」



二セコ町立近藤小学校校長
 「校長として、先生方の共通理解を図って仕事していくことを大事にしたい」

S c h o o l D a t a

北海道二セコ町立近藤小学校

◎1902(明治35)年の開校以来、100年以上の歴史を持つ。校区の基幹産業は農業だったが、近年は全国各地からの移住者が増加し、今では地域住民の約半数が農業以外の職業に就く。校区内の全94戸がPTA正会員となり、地域ぐるみで学校を支えている。



校長 河田 茂先生

児童数 19人 学級数 3学級

所在地 〒048-1542 北海道虻田郡二セコ町字近藤266

TEL 0136-44-2852

URL <http://www.town.niseko.hokkaido.jp/kondo-s/>

公開研究会 2010年度の日程未定

*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

*2010年4月時点

研究のねらいと取り組み

西小学校樺山分校

「セルフタイム」を含めた学習過程を明確化

西小学校樺山分校（以下、樺山分校）が目指すのは、「学習内容や取り組みの手順を明確にし、児童が主体的な活動を通じ、理解・解決できたことを実感できる授業」「児童の発言や活動の場を保障し、児童同士・児童と教師の関わりが見える授業」だ。2009年4月に瀧澤祐司教頭と研修担当の長谷川徹先生がこの実現に向けた学習過程を提案。複式授業の要となる間接指導を「セルフタイム」とし、教師・児童共に定着を図った（図1）。

研究は、子どもが「できる・わかる」を実感しやすい算数を中心に、同年5月に校内で授業を見合うところから始めた。この年は樺山分校が「後志へき地・複式教育研究発表大会」の会場になったため、低・中・高学年で各1人、複式指導の経験豊富な他校の校長らにアドバイザーを依頼し、年3回、研究授業を見てもらった。アドバイザーからの助言が教師の意欲につながったと瀧澤教頭は話す。「アドバイザーは毎回、授業や子どもの良くなった点と共に、新たな課題を指摘してくれました。その時々々の成果と課題を明確に出たことが、先生方の意欲につながりました」

図1 西小学校樺山分校の複式学習過程（1時間）例：3・4年生

3年生の学習過程	指導	段階	段階	指導	4年生の学習過程
1. 前時や関連単元の想起 2. 問題提示 3. 課題把握 4. 解決の見通しを立てる	直接指導	つかむ	ふかめる	間接指導	1. 習熟 2. 振り返り、自己評価 セルフタイム
1. 自力解決 2. 友だちと考える 3. 別の自力解決方法を考える 4. 発表準備 5. 発表 セルフタイム	間接指導	かんがえる	つかむ	直接指導	1. 前時や関連単元の想起 2. 問題提示 3. 課題把握 4. 解決の見通しを立てる
同時間接 [教師の見取り]					同時間接 [教師の見取り]
1. 出てきた考えを比べる 2. 正しい考え方、解き方をつかむ 3. 規則やきまりを見つける 4. 課題を振り返ってまとめる	直接指導	まとめる	かんがえる	間接指導	1. 自力解決 2. 友だちと考える 3. 別の自力解決方法を考える 4. 発表準備 5. 発表 セルフタイム
1. 習熟 2. 振り返り、自己評価 セルフタイム	間接指導	ふかめる	まとめる	直接指導	1. 出てきた考えを比べる 2. 正しい考え方、解き方をつかむ 3. 規則やきまりを見つける 4. 課題を振り返ってまとめる

*間接指導=セルフタイム

■セルフタイムの確認事項

- セルフタイムのルールを確認する
- 活動時間を意識した取り組みをさせる
- セルフタイム直前の直接指導時において、課題と活動内容を確認、板書する
- 課題にあった活動内容を、学年に応じた言葉を使って提示する

■セルフタイムのルール

- 課題はOK？
- 友だちに相談OK！
- ヒントをもらってOK！
- リーダーさん、お願いします！

近藤小学校

学級ごとに言語力の重点指導目標を設定

近藤小学校が研究時に意識したのは、6年間の系統性だ。教師のアンケート結果を基に、「言語活動における学年別目標」を「読む・書く・話す・聞く」の4技能別に作成。更に、学級ごとの実態に合わせて年間の重点指導目標を設定した。研修担当の児玉瑞佳先生は、「本校は少人数ですから、学級目標は個々の子どもの目標に近い内容です。言語力を高め、それを土台に表現力を培うというように、個

人の課題に合わせて2〜3年計画で進めていきます。子どもが全校児童の前で発表する機会を設けるなど、国語に限らず、日常的な活動にも言語活動を取り入れています」と話す。研究授業は学級ごとに、前期と後期の年2回実施。前期終了時に成果を踏まえて目標を修正し、後期の研究につなげた。

連携

1校では足りない点を補完し合う

複式学級を有する学校は近隣では両校しかなく、研究を深めるために約6年前から2校での連携を開始。互いに授業を見合う「授業

つづけたくなる授業研究

図2

連携の概要

○授業交流

互いの授業を見合う教師同士の交流。通常の授業をしなごらのため、1校につき低・中・高学年の3日間に分け、もう1校は少し時期をずらして行う。通常は年1回だが、09年度は榊山分校が「後志へき地・複式教育研究発表大会」の会場となり、その準備のため年4回実施した。

○児童交流

両校の子どもと一緒に、体育や音楽などの授業を受けるもの。普段は出来ない多人数でのサッカーなどを楽しめる機会だ。榊山分校が授業交流を担当する年度は近藤小学校が児童交流を担当するといった具合に、交互に主催するシステムになっている。

◎成果

子どもの姿が徐々に変化

榊山分校では09年4月当初、間接指導の時

交流」と、子どもが授業を一緒に受ける「児童交流」だ(図2)。授業交流では、事後研究会は設けていない。ファクスで質問などを送り合ったり、電話で話し合ったりしている。「その日の最後の時間に公開授業を設定するのではなく、通常の授業を見てもらうため、見に来た先生に残っていただき時間をかけて研究会を開くわけにはいかないからです。堅苦しい形にするよりも、気軽な感じの方が長続きすると思います」(近藤小学校・児玉先生)

に子どもがざわつくことがあった。何をしたら良いのか分からず、戸惑う姿も見られた。だが、研究を進めるうちに、子どもの様子が徐々に変わったと長谷川先生は語る。

「変化が顕著に表れたのは10月ごろでした。教師が学習過程を確立するにつれて、子ども自身が学習過程を意識して、間接指導の時に何をすれば良いのかが分かるようになっていきました。間接指導でも、子どもは集中して黙々と学ぶようになりました」

一方、近藤小学校では、学級ごとに設定された重点指導目標に合わせ、不足している力の底上げが出来た。例えば、1年生には話す内容や話し方を指導し、徐々に子ども自身に考えさせていく小さなステップを踏ませた。この結果、09年度の修了式で全校児童が1年間の反省と次年度の抱負を発表した際、1年生も下書きなしで言えるようになった。

「低学年の子どもは高学年が発表する姿を見て『あのようにになりたい』とあこがれを抱きます。上級生が身近な存在になる小規模校の良さです。教師にとっては学級ごとの重点目標を設定することで、ポイントを明確に指導できるようになりました」(児玉先生)

教師の指導改善のきっかけに

両校の連携は、複式学級の経験の浅い榊山分校の教師にとっては、経験豊富な近藤小学校からノウハウを吸収し、他教科の複式指導

について学ぶ機会となった。長谷川先生は、「小規模校では、教師も外部との交流が不足しがちです。指導力向上のためには他校との連携が欠かせません」と話す。

近藤小学校にとっても意義は大きい。児玉先生は、「普段何気なく行っている声掛けやノートの取り方の指導などについて、榊山分校の先生から質問されたことで、自分の指導を見直すきっかけになりました」と話す。

◎成果を支える要因

必要性の高いテーマを全員で共有

榊山分校では、間接指導の充実という喫緊の課題を研究テーマとしたことが大きい。

「『やらされ感』のある研究に意欲はわきまません。授業の質が高まり、子どもの力が付いてきたと実感できる研究にすることが大切です」と村井満校長(当時)は話す。必要性に加え、研究テーマを分かりやすい言葉で年度初めに共有したことも、研究活性化の要因だ。「4月に全員で目指す授業の姿を共有しました。初めに全員の気持ちをそろえられたことで、職員室で話題づくりがしやすくなり、同僚性も高まりました」(長谷川先生)

教員数が少ないからこそどの教師も頑張っている、近藤小学校の河田茂校長は話す。「小規模校では、教師は毎日全員の子ども

と接します。教材であれ日常会話であれ、常に新しいものを出していかないと、子どもに飽きられてしまいます。自ら必要性を感じ、休みの日は積極的に外部の研修へ出掛けて校内で共有することが、本校では日常となっています」

遠慮せず意見を言い合う

両校に共通する持ち味の一つは、自由に発言できる雰囲気にある。それは、両校の連携においても同様だ。双方の授業について、時には「こうした方が良かったのでは」「私ならこうします」という厳しい指摘もある。もちろん、信頼関係があつてこそ出来ることだ。09年度は樺山分校での研究大会があり、その運営を近藤小学校も手伝った。何度かの懇親会も経て、より関係が深まったという。樺山分校の村井校長は、「研究のためだけでなく、人間同士の付き合いがあつて初めて連携は長続きすると思います」と話す。

樺山分校の長谷川先生は、「他校の先生に授業を見せるといふと緊張と思いますが、両校においてはそういうことは全くありません。普段の授業を見てもらい、本当に役立つアドバイスを欲しいからです」と言う。

一人ひとりを尊重しながら管理職が支援

両校とも、校務分掌に関係なく、教師は気付いたら率先して動き、学校を動かしている。

近藤小学校の児玉先生は、「校長が教師個々の独自性を大切にしてくれるので、各自が得意分野で力を発揮できるチームになっています」と話す。また、担任1人に任せすぎないことも大切にしている。樺山分校の瀧澤教頭は、「先生方を尊重する一方、任せすぎずに教師全員で取り組むことも大切にしています。そして、先生が迷ったり悩んだりしている時には、積極的に助言しています」と話す。

各校の研究成果が現れている一方で、複式校ならではの課題が浮上している。単元指導（A・B年度方式）の見直しへの対応だ。単元指導は、理科や社会科などで2学年同じ内容を指導するもの。例えば、5年生が6年生の学習をするなど、2学年分の教育課程を組み替え、A年度とB年度の2年間をかけてすべてを履修する方式だ。北海道では、学校の統廃合や児童の転出・転入の時に未履修分野を出さないようにするため、出来るだけ学年別の指導に変えていく方針としている。「学年別の指導になると、学年に1人しか子どもがいない場合、1人で理科の実験や社会科の体験学習をしなければならぬことも考えられます。それでは子ども同士のコミュニケーションに広がり生まれません。小規模校の実情に合わせて、柔軟な対応を考えていくことが大きな課題です」（近藤小学校・児玉先生）

近藤小学校河田校長が重視する

校長としての役割

私が大切にしているのは、先生方の輪です。私はクッションかスポンジか、そういう立場で動いていると思っています。先生方が研究を進められる原動力は、子どもが変わる姿を目にし、成果が上がっていると実感できることです。

もう一つ、地域とのつながりが強い本校は、地域から期待されています。これも先生方のエネルギーになっているかもしれません。学校評価の結果から課題を発見し、それを解決していくことを大事にしていきたいと考えています。

樺山分校村井校長が重視する

校長としての役割

私は西小学校本校の校長と兼務しており、樺山分校に常駐しているわけではありません。そのため、私が意識的に行っているのは、学校に出勤した時には、子どもの成長はもちろん、先生方が頑張っている姿を見つけ、その機会を逃さずに評価し、賞賛することです。

人は大人であっても、自分の納得できたことを褒められればうれしいもので、次への意欲に結びつきます。先生方が気持ち良く、更に積極的に研究が出来るように配慮したいと考えています。

校長の率先垂範と教育委員会の 支援で「日々の授業」にこだわり抜く

和歌山県 有田川町立藤並小学校、有田川町教育委員会

有田川町立藤並小学校では、子どもの学力を高めるために、日々の45分の授業時間を大切にすることを授業改善の中心としている。その上で、同様の考えを持つ教育委員会の施策も活用しながら、教科担任制などのさまざまな取り組みを行っている。

学校概要

児童数598人。22学級（うち特別支援学級3）。
教員数32人。20代、30代前半、50代が多い。
*取材時（2010年3月）のもの

研究の方向性

- **日々の授業を大切にすることで授業改善**を目指す
- 校内授業研究会は節目として、現状の授業や子どもの姿を確認・共有する場と捉える

取り組みと成果

- **子どもや教師が45分の授業に集中できる環境**を整備
 - ≫ 1時間の授業が充実し、学習への集中力も向上
- 教科担任制を導入
 - ≫ 子どもの学習意欲が向上。教師の指導力も高まる
- 教師の主体性を重視した校内授業研究会の実施
 - ≫ 研究への意欲が高まり、日々の授業改善に結びつきやすくなる

成果を支える要因

- ◎ **校長先生の姿勢**
校内を頻繁に見て回り、教師と目線を共有。**リーダーシップを発揮する一方で、教師の意見も尊重**する
- ◎ **教育委員会のサポート**
「**教員を元気にする**」をモットーに、学校の主体性を重視する各種施策を打ち出している

和歌山県有田川町

◎2006年に吉備町・金屋町・清水町が合併して誕生。人口約3万人。古くから農林業が発展し、「有田みかん」の産地として有名。町立小学校16校、町立中学校6校を有する。04年から独自にALT2人を配置し、英語教育にも力を入れる。

有田川町教育委員会

所在地 〒643-0152 和歌山県有田郡有田川町大字金屋3

TEL 0737-32-3111

◎事務局の指導主事3人で小中学校22校を担当

S c h o o l D a t a

◎1886(明治19)年開校。
算数の授業では、1、2、4年生でチーム・ティーチング指導、3～5年生で習熟度別授業を行う。6年生は算数、音楽、「総合的な学習の時間」以外の7教科で教科担任制を導入している。



校長 久道憲生先生（2010年4月から）

児童数 591人 **学級数** 22学級（うち特別支援学級3）

所在地 〒643-0032 和歌山県有田郡有田川町天満439-1

TEL 0737-52-2069

URL <http://www.naxnet.or.jp/~fujinami/>

公開研究会 なし

*2010年4月時点

課題と研究の方向性

日々の45分間の授業を大切に

「授業は日々の指導を通して継続的に改善すべきと考えています。校内授業研究会もいますが、本校では一つひとつの授業を大切にすることを授業改善の中心に据えています」と、藤並小学校の栗山高明校長（当時）は語る。

子どもの学力を確実に向上させるため、栗山校長が教師に伝え続けているのが、「授業時間の『45分間』を大事にすること」だ。栗山校長は中学校教師だった経験があり、小学校に赴任して、小学校教師は授業時間に対する意識が甘いという印象を受けた。

「授業が時間内に終わらなければ次の時間まで延長したり、チャイムと同時に授業を始めなかつたりすることが、しばしば見られました。そのことが、休み時間が終わっても子どもがなかなか教室に戻らない一因になっていると思えました」（栗山校長）

日々の授業を中心に据え、校内授業研究会は「節目」として、指導内容や方法、子どもの姿などを確認・共有する場とする。赴任当時の研究会では学校全体で一教科を研究テーマとしていたが、そこにも課題を感じたという。

「教科への関心は先生によって異なり、例えば音楽専科の先生が担当外の教科の研究に

対して『蚊帳の外』と感じているようでした。どの先生も主体的、意欲的に参加できる校内授業研究会の体制にすることが、研究を活発にし、授業改善につながると考えました」

取り組みと成果

授業に対する意識を高める

まずは、子どもが落ち着いて授業を受けられる環境を整えることに重点を置いた。栗山校長は赴任してすぐ、「子どもや教師に一つひとつの授業の大切さを伝えるために校長として何が出来るか」を考え、毎日、休み時間が終わりに近づく¹と校庭に出て、子どもにも中に入るように促した。この間、教師は教室に入って準備を進める。

次第に、子どもの中に授業開始1分前に着席する習慣が定着し、どの学年も45分間の授業をきっちり行えるようになった。

「単に教室に戻るだけではなく、気持ちの切り替えも上手になり、授業開始後すぐに学びに向かえるようになりました」（栗山校長）
教師は授業の準備に集中できると共に、授業時間に対する意識も高まった。

教科担任制で

子どもにも教師にも変化

次に着手したのは、6年生における教科担



写真 休み時間に校庭で遊んでいた子どもは、栗山校長の姿を見ると校舎に向かって走り出す。勉強と遊びとのけじめを教える指導で、次第に切り替えが出来るようになる

任制の導入だ。教育委員会から1人の教師を加配してもらい、2005年度に始めた。栗山校長は導入の理由を「子どもに荒れの芽が見られたことが一因」と話す。

「複数の教師によって子どもを見取ること、学級崩壊のような状態に陥るのを未然に防ごうとしました。中学校の授業形態に小学生のうちから少しでも慣れておけば、『中1ギャップ』も解消できます。教師にとっては、同じ授業を別のクラスでも行うので、改善を反映させやすいですし、45分という時間への意識が高まるという期待もありました」

導入後に実施した子どもへのアンケートでは、9割以上が「教科担任制が良い」と回答した。「多くの先生とかかわれて楽しい」「気持ち切り替えられる」「専門の先生だから

つづけたくなる授業研究

授業が分かりやすく質問しやすい」「中学校のようでやる気になる」といった声が挙がる。教師にも変化が見られた。担当教科に対する責任感が強まり、教材や指導法の研究に積極的になった。また1クラスに複数の教師がかかわるため、教師の連携や協力が進んだ。更に、教師の持ち時間数が軽減され、時間的なゆとりが確保された。

教師の主体性を重視した授業研究

05年度からは、校内授業研究会での研究テーマを自分の関心に応じて選べるように変更。自主的な研究を促している。

「全員共通のテーマにすると研究は深まりやすいですが、それぞれが課題に感じているテーマを設定した方が、より意欲的に取り組めますし、自分の授業に活かしやすいと考えました」（栗山校長）

09年度は国語、社会、算数、理科、音楽の教科ごとに研究を進め、成果の共有を図った。「校内授業研究会に参加する際には自習にしてクラスを離れることがあります、それは日常の授業を大切にするという観点では望ましくありません。そのため、『全員が必ず年〇回授業を公開する』といったルールは設けず、実施時間などに配慮しています」（栗山校長）

「大研」という全員での校内授業研究会を低・中・高学年がそれぞれ年1回担当し、「小

研」という各学年担任での校内授業研究会を各学年で年3回実施する。小研は、関心のある教科であれば、他学年でも自由に参加できる。校内授業研究会では教師間の議論を大切に、栗山校長は議論を深めるコメントをする立場に徹する。

こうした校内授業研究会にした結果、教師がそれぞれ自分の関心のある教科や領域に取り組むようになり、研究への意欲が高まった。

◎成果を支える要因

校長先生の姿勢

校長と教師とが目線を共有する

「私は、普段は校長室にいない校長」と語るように、栗山校長は1日1回は全教室を見て回る。そして、休み時間には自ら校庭に立ち、直接の支援を行う。

「子どもの実態を自身の目で把握することで、教師と課題を共有でき、改善に向けた話がしやすくなります」（栗山校長）

同校には20代の若手教師が多く、教師間の力量の差が大きい。校長が授業を見て回ることで、アドバイスを個別に伝えられる。

教師の多様な考えを尊重する

教科担任制の導入には、町内で前例がないために反対する教師もいたが、栗山校長は導

入に踏み切った。その際、教師の考えも尊重し、「もしマイナスになるようなら1年間でやめましょう」と伝えた。

校長としてのリーダーシップを発揮して施策を提案すると同時に、教師間で徹底的に議論させる。そして、子どもの姿の変化など、教師の考えを聞いて、施策を改善していく。この栗山校長の姿勢は、校内授業研究会で教師の議論を重視することにも表れている。

教育委員会のサポート

「教師が元気になる」を目的に施策を考える

有田川町教育委員会（以下、町教委）でも、「日々の授業を大切にすること、毎日『当た



有田川町立藤並小学校校長
栗山高明
Kuruyama Takashi
「時代の流れに目を向けながらも不易の授業を大事にしたい」



有田川町教育委員会教育長
楠木茂
Kusaki Shigeru
「自己満足で終わらず、常に子ども目線で考えることが重要」



有田川町教育委員会課長補佐（指導主事）
片嶋博
Katashima Hiroshi
「教育は相手を変える仕事。同時に自分も変わっていく気持ちが必要」

*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

り前』を積み重ねていくことが授業改善につながる」（楠木茂教育長）と考え、学校を支援している。そのためには「教師の元気」が不可欠だと考える。

「教師が元気でなければ、授業改善の意欲は生まれませんし、子どもも生き生きと学べません。教師が快適に働ける環境を整えるのが先決と考えています」（楠木教育長）

特に重視するのが教師の自主性だ。「自分たちのしたいことが出来る」と思えば、教師が元気になり、学校は変わると考える。

学校が自由に使える 「学校奨励金」を予算化

学校の自主的な活動を制約する主な要因となっていたのは、予算上の問題だ。従来の予算体系では使途の制限が厳しく、学校が新しい活動を始めようとしても自由に動けなかった。そこで、03年度に使途を限定しない「学校奨励金」を予算化した。

09年度は有田川町として小・中学校全体で1200万円を予算化。各校で活動計画を立案し、年度末の校長のプレゼンテーションに応じて翌年度の配分を決める形式とした。

片嶋博課長補佐は、「使途は原則的に自由ですが、単発の行事ではなく、放課後の補習のための人件費や、特別支援教育の支援員手当てといった学力向上などに結び付く日常的な取り組みを推奨しています。最初は使いだ

を考えあぐねる学校もありましたが、次第に校長がリーダーシップを発揮するなどして独自の取り組みを提案し、各校の特色が表れるようになりました」と話す。

授業に集中できるよう 学校設備を充実

学校から提案された取り組みを支援する施策も行う。教師が自主的に考える雰囲気が出てきた中で、校長会で授業日数の確保を目的として夏休み短縮が提案された。それを受け、町教委は04年度から順次、各校にエアコンを設置した。楠木教育長は「校長会の自主的な判断を後押しし、暑い中で頑張る子どもや先生を支援したいと思いました」と語る。

大半の小・中学校で設置は完了したが、実際にはあまり使われていない。ただ、「エアコンがあることで、とても暑くなっても大丈夫だと思えます。こうした心のゆとりが活力の元になるのです」と、楠木教育長は言う。

09年度には全校に電子黒板を、10年度には教師に1人1台のパソコンを配備する。これらの設備費用や学校奨励金を確保できた背景には、町内に優良企業が多く、比較的財源が豊かであり、地域住民の教育に対する関心が高いことがある。ただし、町長や議会に予算化の必要性を丁寧に説明するなど、積極的な働き掛けが実を結んだ面も大きい。町財政に占める教育支出の割合が高く、町全体で学校

教育を支える体制は、学校と教育委員会の努力によりつくられてきたのだ。

事務作業効率化を推進

町教委は、各校の児童数や行事予定などのデータを集約して管理。県や国の調査・照会には出来るだけ学校に回答を依頼せず、町教委がまとめて対応する。各校に頻繁にあった問い合わせはかなり減少している。また、学校要覧（図1）はA4用紙1枚に書式を統一し、研究紀要は無駄に分厚くならないよう内容の厳選を呼び掛けるなど、書類の簡素化も進める。

「学校側の事務作業を出来るだけ減らし、子どもへの対応や授業の準備に集中してほしいという思いがあります」（片嶋課長補佐）

各校には取り組みをメールなどで報告してもらい、町教委が取りまとめて「学校&教委ニュース」（図2）を発行。町議会や和歌山県教育委員会などの関係機関に発信している。教育活動への理解を深めることが、教育予算の確保や地域からの協力につながり、結果として日々の教育の改善へ結び付く。学校の改善につながるという成果の実感と、メールでの報告という簡便性があるのだろう。報告の頻度は定めていないが、3日に1回は学校から報告が届く。

町教委では右記の施策の前提として、次のことを大切にしている。



気張らずに時間をかけて 教師全員で外国語活動に取り組む

山梨県北杜市立高根西小学校

北杜市立高根西小学校では、子どものコミュニケーション能力を高めようと、1年生から外国語活動に取り組む。学級担任が実践を見せ合い、活動について教師同士が意見交換しやすい環境を整えるなど、どの教師も効果的な指導が出来るように工夫している。

蓄積してきた指導案を基に「英語ノート」を部分的に使用

北杜市立高根西小学校は、自然豊かな八ヶ岳南麓に位置している。単学級の小規模校であるため、異学年も含めた子ども同士のコミュニケーションは円滑だが、よく知らない相手に対しては、自分の考えをうまく伝えられない場合が見られるという。そうした子どもたちのコミュニケーション能力を高めるため、同校では「自ら考えよく学び、生き生きと活動する児童の育成―外国語活動の実践を通して―」を研究テーマに、全学年で外国語活動を行う。河西俊

英校長は、そのねらいを次のように説明する。

「グローバル社会を生きる子どもたちには、相手の言葉に耳を傾けるだけでなく、自発的に相手とコミュニケーションを取る力を身に付けて欲しいと思っています。1年生から外国語活動に取り組んでいるのも、コミュニケーション能力を早くから育むためです」

同校は10年以上前からALT主導による外国語活動を行ってきた。2004年度、山梨県教育委員会からの研究指定を受けたのをきっかけに独自の指導案を作り、担任主導の活動を始めた。

現在は、6年間で少しずつ蓄積してきた独自の指導案を基に「英語ノ

ート」を部分的に活用している。

実際の活動を見学し活動へのイメージを具体化させる

年間の外国語活動時間は、1～4年生が10時間、5・6年生が35時間。1～4年生は余時数、5・6年生は「外国語活動」の時間を活動に充てている。

1年生から外国語活動を行っているため、全学年のカリキュラムと指導案を基に教師全員で研究を行う。その意義を、浅川孝夫教頭（当時）は次のように説明する。

「担任が代わって外国語活動のやり方も変わってしまったのは、全児童

の力を伸ばせません。教師全員で取り組むことが重要です」

そのため工夫は、次の3点にまとめられる。

1. 教師同士が実践を見せ合う
年3回、研究会として授業を公開

図1 外国語活動の方針

- 簡単な英語を堂々と!
- 短い単語でもメッセージは伝えられる!
- ジェスチャーや表情を有効に使って!

“This is my English!”

という気持ちで、子どもたちと一緒に活動しよう!

するほか、教師が希望すれば、いつでも他の教師の外国語活動を参観できる。これにより、新しく赴任して来た教師でも、担任主導の外国語活動の授業を具体的にイメージできる。研究主任の内藤茂樹先生は、同校に赴任して外国語活動の取り組み方を変えたという。

「前任校ではA・L・Tに任せきりで、担任が活動を進める方法が分かりませんでした。本校で他の先生方の取り組みを見学し、助言をもらうことで、改善点が見えてきました。具体的な実践を見ると、色々なアイデアも出やすくなります。今では、進行するのは担任、発音はA・L・Tと、活動の中で役割を分担しています」

2. 全教師で知見を共有

全教師のパソコンをLANでつないで共有フォルダを作り、そこに外国語活動の指導案を入れている。指導案には教師が自由にコメントを書き込めるスペースを設け、日々の活動によって気付いた反省点や改善点を共有する。それを他の教師が自分の外国語活動に生かすだけでなく、次年度のための修正案にも反映している。

「子どもにとって楽しい外国語活

動とするために、良い実践を蓄積し、他の先生が気軽に取り入れられ、更に改善していく環境づくりを大切にしています」(河西校長)

教材も、教師が個々に管理するのではなく、教材保管のための部屋を用意し、全教師で共用する。教材を作る時間を節約し、活動研究を行うことで、授業がレベルアップした。また、「英語ノート」は、教師全員で活用法を検討し、同校の外国語活動に合うように工夫して取り入れられている。

3. 互いに相談できる雰囲気づくり

研究会の場以外にも、教師同士が日常的に外国語活動について意見を交換し、相談し合えるような雰囲気をつくっている。普段の意見交換は研究主任が中心だが、時には管理職から声を掛ける。管理職が常に、現場の教師の抱える仕事を把握すると共に、指導改善の取り組みが正しい後手に回ってしまいうような時の「ペースメーカー

」的な役割も果たしているという。「忙しい中でも教師が外国語活動への意欲を維持し、実践を重ねられるように、日頃から現場の状況に注意し、声かけをしています」(浅川教頭)

気張らずに 小さな努力を 続けることが大切

同校では、外国語活動に限らず、「継続していく姿勢」を大切にして

「時間をかけて良いものを身に付けていくのが教育です。研究指定を

受けた期間、あるいは特定の教師がいる期間だけでなく、常に、どの教師も効果的な活動が出来る環境を整えることが大切だと考えています」(河西校長)

こうした取り組みの成果は、外国語活動に対する子どもの反応にも現れている。09年度の児童実態調査では、外国語活動が「好き・どちらか」というと好き」という回答が9割以上を占めた。

「子どもの様子を見ながら、無理のない範囲で少しずつ改善を重ねてきた結果だと思えます。今後も、小さな努力を積み重ねる教育を続けていきます」(河西校長)

School Data

山梨県北杜市立高根西小学校

概要 1873(明治6)年開校。2004年度、山梨県教育委員会の研究指定を機に、児童のコミュニケーション能力を育むため、独自の指導案を作り、担任主導の外国語活動を続けている。

校長 河西俊英先生

児童数 197人

学級数 8学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒408-0118 山梨県北杜市高根町村山西割1696

TEL 0551-47-2025

URL <http://www.takane-nishi.city-hokuto.ed.jp/>

研究発表会予定 未定



北杜市立高根西小学校
河西俊英 Kasai Toshihide

校長

「何事にも明るく、前向きに対処し、他の先生を元気付ける存在でありたい」



北杜市立高根西小学校
浅川孝夫 Asakawa Takao

教頭

「地域の持つ良さを最大限に生かし、心豊かな人間を育てたい」



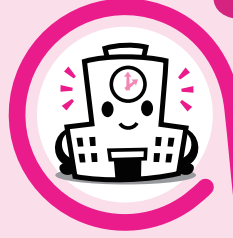
北杜市立高根西小学校
内藤茂樹 Naito Shigeki

研究主任

「楽しい授業をする中で子どもと共に成長する教師でありたい」

*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

つながる



学校と家庭の学び

家庭での会話が弾み

国語力が伸びる「日の出っ子ノート」

福岡県春日市立日の出小学校

春日市立日の出小学校では、連絡帳と日記帳を兼ねる「日の出っ子ノート」を学校全体で活用している。保護者用のコメント欄を設け、児童の学校での様子を把握出来るようにしたことで、家庭での親子の会話が増えたという。

親子の会話のきっかけとして「日の出っ子ノート」を活用

福岡市に隣接する春日市北部にある日の出小学校は、1999年に開校した新しい学校だ。地域の人々の期待は大きく、教育活動にも協力的だという。

同校は2005年度、文部科学省からコミュニティ・スクール（地域運営学校）に指定された。地域の意見を聞くために保護者を対象に行ったアンケートでは、学校を介して親子の交流を促す取り組みを希望する

声が目立った。この結果を受け、1日1回は親子で会話することを呼び掛ける「一日一話運動」を開始。更に06年度からは、連絡帳と日記帳を兼ねる「日の出っ子ノート」（図1）を全校で導入。親子の会話のきっかけとなるように活用している。

ノートは1週間が見開きになっており、左ページには翌日の時間割や持ち物などを、児童が帰りの時間に記入する。右ページには、日記、自己評価、保護者のコメント欄があり、児童はノートを持ち帰って日記と自己評価を書く。保護者がそれを読み

でコメントすることにより、子どもの学校生活の把握と家庭での話題作りに役立ててもらおうというわけだ。

ノートは翌朝、担任に提出する。教師は内容を確認して判を押し、帰りの時間に返す。あくまでも児童と保護者のコミュニケーションツールというスタンスのため、教師はコメントを書かない。

また、日常生活の規範や長期休暇の過ごし方を書いたページも設け、家庭生活の目安にもなっている。「日の出っ子ノート」は導入から5年目となり、既に保護者の間でも

定着したという。その理由を井口司校長（当時）は次のように説明する。

「毎年4月に行う保護者との懇談会では、『日の出っ子ノート』の目的や使い方、前年度からの変更内容などについて時間をかけて説明します。学校で教えた知識や習慣の定着には家庭での実践が大切であることも述べ、『学校と家庭で役割を分担して児童を育てましょう』と、理解と協力を求めています。また、親子の会話が増えたり書く力が伸びたと保護者が実感しているのも、このノートが続いている理由の一つです」

自主学習の手引き部分は ノートからあえて分離

「日の出っ子ノート」は、毎年少しずつ改訂し、運用方法にも変更を加えてきた。現在のノートの特徴は

次のようにまとめられる。
1. **児童の思考の流れに沿った構成**
当初、自己評価欄は左ページにあったが、左ページに学校で書く項目、右ページに自宅で書く項目をまとめ、左から右へと書き進める形に変更し

図1 日の出っ子ノート(中学年用)

【第 週】	時間割	家庭学習	持ってくるもの (れんらくなど)
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20			
21			
22			
23			
24			
25			
26			
27			
28			
29			
30			
31			
32			
33			
34			
35			
36			
37			
38			
39			
40			
41			
42			
43			
44			
45			
46			
47			
48			
49			
50			
51			
52			
53			
54			
55			
56			
57			
58			
59			
60			

見開き2ページを1週間で使う。日記は、低学年は3行、中・高学年は5行を書く。自己評価欄「振り返りシート」は、○を1点、×を0点として一週間の合計点を算出し、最終的に年間合計点を出す。点数の集計と分析は、学校運営に参画する地域・保護者が行い、教師の負担軽減につながっている



「日の出っ子ノート」(一部)は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロード出来ます
<http://view21.jp/s0141/>

た。導入時からノート作成にかかわっている江口尋信先生は、その理由を次のように説明する。
「日記を付けてから自己評価をし、その日の自分を改めて振り返るといふ思考の流れを重視しました。記入ページを学校と自宅に分けてあるので、書き忘れも防げます」
2. **前期・後期で分冊化**
ノートはB5判で、前期と後期で1冊ずつ使う。1年目はA4判で年間1冊だったが、ランドセルにしまいにいく、1年を通して毎日使うと傷みが激しいため、分冊にした。
3. **保護者の負担を減らす配慮**
保護者がコメントしやすいように、学級だよりに記入例を掲載した。保護者が忙しくてコメントが書けない

場合には、一言だけ、あるいはサインだけでも良いことにしている。
4. **担任の負担も軽減**
当初は教師が書いていたコメント欄を保護者用とし、教師は判を押しのみと改めた。
「毎日、授業の合間にクラス全員分のコメントを書くのは教師にとって相当な負担です。また、『親子のコミュニケーションツール』という元来の目的からも、保護者がコメントを書いた方が良くと考え、保護者にも説明し、ご理解をいただきました。もちろん、保護者から相談や質問があった場合は返事を書くなど、柔軟に対応しています」(井口校長)
5. **「学問のすすめ」ページを分離**
09年度までは、学習態度や家庭学

福岡県春日市立日の出小学校

©1999(平成11)年、春日北小学校より分離独立。05年度に「コミュニティ・スクール」の指定を受け、学校、家庭、地域が一体となった「響育」を実践。式典では三者の三部合唱による校歌が歌われる。

校長 清武直人先生(2010年4月から)
児童数 380人
学級数 14学級(うち特別支援学級2)
所在地 〒816-0873
福岡県春日市日の出町3-1-10
TEL 092-572-4451
URL <http://www.edu.fit.ac.jp/~hinodee>



春日市立日の出小学校校長

井口 司

Iguchi Tsukasa

「学校・家庭・地域が一丸となり実効性のある取り組みを、効率的に、でも一歩一歩着実ににつづきたい」



春日市立日の出小学校

江口尋信

Eguchi Hironobu

4学年担任
「授業研究と子どもに向き合う時間の両方をたくさん作り、もっともっと子どもを伸ばしたい」

*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

習の仕方などを示したページ「学問のすすめ」(図2)が含まれていたが、10年度は、ノートとは別にプリントとして家庭に配布した。

「児童の様子から、ノートにとじ込むだけでは読み返すことが少なく、効果は薄いと感じました。家で勉強

図2 学問のすすめ(中学年用)

学問のすすめ		3・4年生の学習内容の指針(めやす)	
学年		3年生	4年生
国語	読み	音読	○声を出して教科書や学校で買った音読集等をくり返し読みましょう。
		読書	○リズムよく、「ではその人物になりきって読むことができるように練習しましょう。暗唱に挑戦してもいいです。
	書き	漢字の読み	○最低15分は読みましょう。いろいろな分野の読みものを幅広く読みましょう。
		漢字	○ドリル(スキル)や教科書を使ってくり返し、ノートに練習をしましょう。
算数	計算	○その日に習ったノートやプリントをみて、似たような問題をやってみよう。	
	文章題 他	○図形のきまりや単位などはしっかり使って、覚えよう。	
その他	暗記	○地図記号 ○八方位 ○こん虫のからだのつくり ○電気をとおすもの ○しやくにつくもの	
	技能	○コンパスや分度器が使えるようにしましょう。	

続けることで「書くこと」に慣れ
国語力が向上

「日の出っ子ノート」に関して、

机の前に貼り出せるように、画用紙に印刷して配っています(江口先生)

家庭学習の毎日の目安となるよう、低、中、高学年別で作成。具体的に数字を示すのが特徴で、漢字の書き取りでは、3年生が440字、4年生が640字を目標としている



「学問のすすめ」は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロード出来ます
<http://view21.jp/s0142/>

保護者からは、「子どもへの理解が深まった」という意見が多い。普通の学校生活が良く分かるだけでなく、友人関係や勉強の悩みなどを日記から読み取り、解決のために親子で話し合うこともあるという。

成果は児童の学力にも現れている。「何を日記に書けば良いか分からない」と言っていた児童も、毎日書くうちに、書き方も書く内容も自分で工夫し、次第に個性が現れてくるようになりました。09年度の学力検査では、国語力、文章力が伸びていました(江口先生)

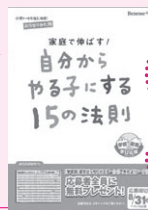
10年度は、ノートの目的として、新たに「学力向上」を加えた。既習の漢字を使い、日記を書いたら読み返して表現を確認するように指導している。保護者にも、今まで以上に漢字や文章の書き方にも注意して目を通して欲しいと呼び掛けている。

「夏休み前の保護者会ではノートを使って生活上の留意点を説明したり、ノートを夏休みの読書カードの代わりとして、日記部分に感想を書かせたりしています。より使いやすく、子どもの力が付くように今後も改良を続けたいと思っています(井口校長)



ベネッセは、**「学校&家庭 学び応援プロジェクト」**を実施しています。

お申し込み受付中



保護者向け冊子
無料

「家庭で伸ばす! 自分からやる子にする15の法則」

学校&家庭 学び応援プロジェクト
ホームページ
<http://www.benesse.co.jp/manabiouen/>

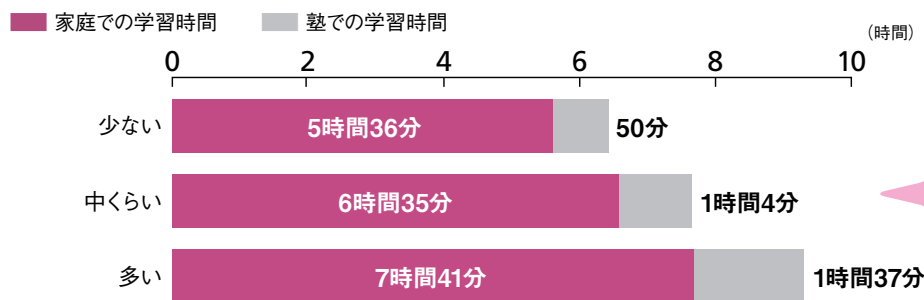
ベネッセは2007年度から「家庭学習に関する冊子」などを先生方やご家庭に無料で提供する「学び応援プロジェクト」を実施しております。2009年度は、のべ約8,200校から約125万冊ものお申し込みをいただきました。

2010年6月は、「子どもに自ら学ぶ力を付ける」をテーマとした保護者向け無料冊子のお申し込み受け付け、また、ご家庭からは夏休みに子どもの漢字力を付ける「漢字ばっちりポスター」のお申し込み受け付けを行います。貴校の教育活動にぜひお役立て下さい。



家庭での会話が多いほど学習時間が長い

小学4～6年生の1週間の学習時間(親子の会話量別)



保護者との会話量が「多い」子どもは、「少ない」子どもよりも1週間あたりの家庭学習時間が2時間長い

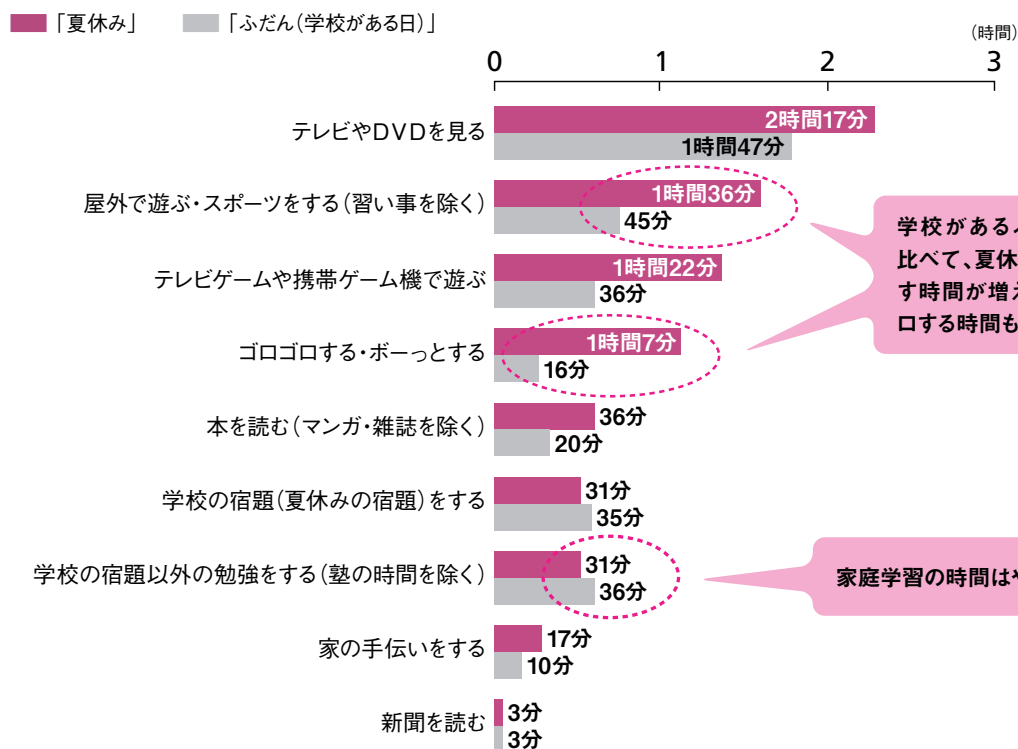
注) 会話量は、父親との会話と母親との会話のそれぞれについて、「よく話をする」を4点、「ときどき話をする」を3点、「あまり話をしない」を2点、「ぜんぜん話をしない」を1点として合計し(10～40点に分布)、これを各グループがほぼ均等になるように「少ない」「中くらい」「多い」の3グループに分けた

出典: Benesse教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」

調査時期は2009年8月～10月、調査対象は全国の小学4年生～高校2年生(うち小学生は3,561人)、調査方法は学校通しの質問紙による自記式調査

夏休みは「ゴロゴロ」「ボーっと」が50分増加

小学5、6年生の生活時間(夏休みと学校がある日との比較)



学校があるふだんの生活と比べて、夏休みは身体を動かす時間が増える一方、ゴロゴロする時間も増加

家庭学習の時間はやや減少!

注) *「ふだん(学校がある日)」は、Benesse教育研究開発センターが2008年に実施した「放課後の生活時間調査」の値を使用

*「学校の宿題(夏休みの宿題)をする」と「学校の宿題以外の勉強をする(塾の時間を除く)」は、「放課後の生活時間調査」ではそれぞれ「学校の宿題をする」、「学校の宿題以外の勉強をする」の値を使用

出典: Benesse教育研究開発センター「小学生の夏休み調査」

調査時期は2009年9月、調査対象は全国の小学1年生～6年生の子どもをもつ母親4,644人、調査方法はインターネット調査



上記の関連データはコチラ!
<http://view21.jp/s0143/>

「授業研究への思い」と「子どもに感じる課題」

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見を紹介します。今号では、これまでいただいたアンケートの中から、「授業研究が有効だと感じる理由」と、「子どもたちについて最も課題だと思うこと」の二つのテーマを取り上げました。

「授業研究」についてのご意見からは、先生方の授業に対する思いを改めて感じました。また、「子どもたちについての課題」では、「思考力、判断力、表現力」を挙げられる先生が目立ちました。

Q 「学校全体での授業力向上」にとって、校内での授業研究が有効だと感じる理由は何ですか

◎どうしても我々教師は、経験年数が長くなるほど自分の指導スタイルが染みついてしまい、新しい指導観や教育課題に合った手立てを考えようとしなくなったり、自分の考えに反する意見が受け入れにくくなったりする傾向もあります。本校の校長の口癖でもある、「謙虚」「誠実」「責任」の3つを兼ね備えた教師であり続けるためにも授業研究会は必要だと思います。 [岩手県／I小学校／S・A]

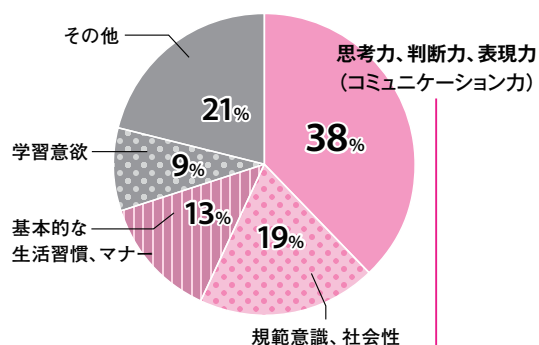
◎学校における授業研究は、教師の力量を伸ばすために欠くことのできないものです。それは実践（授業）を通じた研修だから。教師として力を高めることは、子どもへの思いやりにも通じるものです。 [鹿児島県／O小学校／U・K]

◎教師にとっては、授業力が最も大切だと思います。経験の浅い先生が増える中、実際に授業案を作成し、発問を工夫し、授業する。その反省会の中で、よりステップアップが図れると考えています。 [大阪府／H小学校／H・J]

◎教師の指導力向上は、そのまま子どもの学習意欲の向上につながると 생각합니다。指導力のない授業では、今の子どもは学習に取り組みません。出歩き、おしゃべりなどの課題に対し、教育の指導技術の向上は最も有効な手段だと思います。 [千葉県／S小学校／N・F]

◎年間を通して、子ども一人ひとりの具体的な学習への取り組みの姿に大いに学ぶべきです。理論と実践の両面から授業づくりを考えていく必要があると思うからです。 [鹿児島県／K小学校／M・K]

Q 子どもたちについて最も課題だと思うこと、指導すべきだと感じる点はどのようなことですか



思考力、判断力、表現力の具体的な内容

「目の前のことに疑問や関心を持って、じっくり考える力」
「自分の考えや思いをまとめて、言葉で分かりやすく表現する・発表する力」
「自分から積極的に人やものに関わりを持とうとする気持ち」

*『VIEW21』小学版読者モニター（小学校教師）アンケートより。自由記述回答を『VIEW21』編集部がまとめた。2009年12月、アンケート用紙を郵送。ファクスとインターネットで回収。有効回答数は97

2010年度『VIEW21』小学版 読者モニター募集

『VIEW21』編集部では、誌面評価や企画へのアドバイスにご協力いただける「読者モニター」の先生方を募集しております。1年間で6回程度のアンケートへのご回答と、企画に関するヒアリングなどをご依頼いたします。詳しくは今号と同送している「読者モニター募集のご案内」をご覧ください。

編集後記

今号の編集を通して、改めて、子どもの学びにとっての授業の大切さや、より良い授業をつくるための先生方のご努力を実感しました。先生方の授業に対する深い思いを伺うにつれ、忙しい中で時間を割いて行う授業研究が、形式的であったり、成果を実感できなかったりすることはとてももったいないことだとも感じます。お忙しい中、現実的にはさまざまな制約や難しさがある中でも、先生方の思いがより良い授業研究へ結び付くことを切に願います。(青木)

VIEW21 小学版 2010 Vol.1

2010年6月4日発行／通巻第24号

発行人 新井健一
 編集人 原 茂
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション
 Benesse教育研究開発センター

印刷製本 大日本印刷(株)
 編集協力 (有)ペンダコ
 執筆協力 柴崎朋実、竹間ひとみ、二宮良太、山口慎治

撮影協力 川上一生
 イラスト協力 浅沼リカ、幸 剛

◎お問い合わせ先

VIEW21編集部

電話 03-5371-1238

〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2
東京オペラシティタワー 22階

©Benesse Corporation 2010